

---

# 気まぐれな渡り鳥

陽炎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

気まぐれな渡り鳥

### 【Nコード】

N3489Z

### 【作者名】

陽炎

### 【あらすじ】

二度目の転生……そこで超常の存在になった存在。そんな転生者が向かうは多種多様な世界。

数多の世界で転生者はどんな影響を与えるのか……どんな敵と遭遇するのか。それは誰にも分からない。界を渡りし者、ラーデンガーの変わり者が行く多重トリップ物語。

序章・旅立ち（前書き）

旅立ちです。

## 序章・旅立ち

胸が熱い……灼けつくような熱さだ。オレの目の前には白髪の同い年に見える男の子がいる。

「やれやれ……期待ハズレだよ、ネギ君」

「ガハツ、はっはっはっ……フェイトおお」

オレは胸から生える石の杭だけではなく、腕、脚に刺さる杭によって壁に縫い付けられ身動きが封じられる。魔力ももうない……。オレの……ネギの宿敵のオレを見る目に失望したというような色が宿る。ああ、オレはここで終わるのか。

「姫が一緒なら、君も死なずに済んだのにね。残念だよ、ネギ君……そして、さよならだ」

フェイトが腕を振るとオレの前の地面から巨大な石の槍が突き出、オレの胸を刺し潰した……。オレが最期に見たのは無表情でありながらどこかつまらなそうに見つめるフェイトの顔だった。

「うおっ!?!」

がばりと布団を蹴っ飛ばして飛び起きたオレ。あんまりな夢見に動悸が治まらない。

「うわ、最悪」

びっしょりと汗で服が張り付いて気持ち悪い。もう生まれ変わって  
からかなり経ってるっていうのに……はぁ。っと、ため息をつくオ  
レの側から気配がする。この気配は……。

「どうかしましたかシャーレイ」

「いんや、ただ夢見が悪かったただだよ、ガイア」

「そうでしたか」

彼女はガイア。惑星ボンジュイに住むラー一族の2人いる長の1人だ。ここでのオレの名前はラーデンガー・アイリス・シャーレイだ。アイリスというのが今生でのオレの名前で性別は基本女性だ。名前にも意味があつて“界を渡りし者”というのがオレの名前の意味だ。

「あなたが揺らげばそれだけ世界を隔てる壁が歪むのです。それを自覚なさい」

「へいへい、すみませんでした。で、何か用があつたんじゃないか？」

「揺らぎを感じただけです」

揺らぎ、ね。確かに夢見が悪くて動揺してたからな……世界に影響与えるのも仕方ないな。

「それはすまなかつたな。念のため気分転換に旅にでも出るさ」

「……幾度も揺らいでもらつては困りますからね。いいでしょう、クレイノスには私から伝えておきましょう」

昔はよくあの夢を見て、その度に色んな場所を旅したもんだ……今までは惑星ボンジユイの外の世界ばかりだったし、今回は世界の壁を越えてみようかね。せつかく力持つてるんだし……まあ、狙った世界にはさすがに多すぎて無理だけどな。

ランダムで飛び込むつてもスリルがあつていいだろう……宇宙に出ようが水中に出ようが今のオレには関係ないし。さすがはラー一族と言ったところかね。

「ガイア、満足するまで帰らないとルウとリイにも伝えといてくれ」

「わかりました。ですが、太陽は未だ人の身……彼が生きている間に帰ってきなさい」

「はいはい。ガイア、土産いるか？」

「あなたのお好きに」

それが一番困るんだけどなあ、オレはそうボヤきながら世界の壁を抜ける……実際にはオレの姿が段々と透けていつているように見えるらしいが、オレからは透明な壁を通過している感じが。完全に壁を越えると、そこはどこまでも真っ暗な闇が広がる。

「さて、どこに行こうかね」

オレはそう呟きながら指を鳴らして、薄手の紅いドレスからGパンと紅いパーカーへと着替える。うん、便利便利……性別も変えておきたいが、苦手なんだよな。まあ、性別を変える事態には早々ならんだろう。

そんな細かい事はさて置いて、適当に手近な世界から生きてますか……ファンタジーか、近未来か、それとも現代か。<sup>モダン</sup>楽しみだよ、ほん

## 第1話【通りすがりの旅人だ】（前書き）

ただ立ち寄った世界で、原作有り。ただし、その過去編。

## 第1話【通りすがりの旅人だ】

適当に手近な世界に入ってみればそこは緑生い茂る山の中……うん、自然豊かなのはいい事だけどボンジュイも似たようなもんだから気分転換にはならないな。来て早々に別世界に行くのもなんか勿体ないし保留かな。何か面白いのがあるかも知れない、と茂みを掻き分けながら歩を進める。

「ん？ 血の臭い？」

微かに漂う血の臭いにオレは、臭いを頼りにその場所に向かう。近付いているのか小さなうめき声も聞こえ、おそらくこの臭いの元は人間だろう。幾分か進めばあちこち擦り傷を作り右足首を押さえて蹲っている黒髪の少年を見つけた。その時にガサリと杖を揺らしてしまい、少年はバツと怯えた顔を上げた。

「だ、だれ……？」

「ただの通りすがり。それでどうしたんだ、少年？」

「……落ちて怪我した、だけ」

ふむ、落ちたのか。確かに少年の背中側にはかなり急な坂がある……いや、この角度から崖と言ってもいいか。そこから落ちて怪我だけで済めば御の字だな。さて、どの程度の怪我がこの体になって得た異能を使つて調べてみるか。

擦り傷は見たとおりだけど、右足首は骨が折れてるな。これでは山を歩いて戻れないだろう……しかし、骨が折れて痛いだろうに泣かずに我慢するとは見上げた根性だな。だが、どうして落ちたのか聞いて……いや、面倒だ。頭を覗けばいいな。ふむ、ほう。幼馴染の少女を助けたら自分が代わりに落ちたのか……泣かないのも助けに来るだろう引率の教師に付いて来るかもしれない幼馴染に見られたくないためか。

小さいながらも男の意地を持っているのか……よし、気に入った。オレに会った記憶を助けたら消そうかと考えていたが、そのままにしておこう。

「ほれ、少年。足をオレに見せてみる」

「……え？」

「いいから」

おずおずと折れている足を出す少年。素直であるのは好感触だ。オシはしゃがみ込んですぐに少年の足に手を翳す。

「……………うわぁ」

少年はオレの手から発する光に驚きの表情を浮かべる。本当なら骨折は自己治癒に任せた方がより強くなるんだが、歩いて帰るなら治した方がいい。普通の治癒魔法なら骨が脆くなるので逆効果だが、今オレがしているのは魔法ではなく異能力だ。

これならば骨が折れる前の状態に戻るだけだから、この場合に適している。前世の世界で学んだ魔法のほとんどが異能力で代用できると、なんだか虚しくなるが。使えるのなら気にしない方がいいのだろう。そして、完全に骨が治ったのを異能で精査して確認する。よし、完治だな。

「どうだ、痛みは引いただろう？」

「う、うん。お姉ちゃん、一体なにをしたの？」

「なに、ちょっとした魔法さ。ついでに擦り傷も治そうか……………ただ、完全に治すと不自然だからカサブタまでだがな」

擦り傷の方は治癒魔法だ。異能だとカサブタを通り過ぎて治すから加減が利かない。加減が必要な時は魔法は役立つし、やっぱり努力したのは無駄じゃなかったな。一通り目に見える場所はカサブタまで治して、見えない場所は異能で完治させる。

「痛みが全然無い……すごい！」

「そうだろう。さて、少年。連れがいるところまで付いていこう……  
…そうだ、名前を聞いていなかったな」

「俺は織斑一夏、小学2年生です。お姉ちゃん、怪我を治してくれてありがとうございます」

「どういたしまして、かな。オレはシャーレイ・ラーデンだ。シャーレイかレイ、どちらでも好きなように呼んでくれていい」

織斑一夏か。どこかで聞いたような名前だが、どこで聞いたのか……  
…まあ、長いこと生きていたからかなり昔なんだろう。

「うん、わかった。レイ姉」

ぐっ、なんだこの可愛い生物は……顔が整ってるから上目遣いで見上げてくる仕草がヤバイ。しかも、レイ姉なんて呼ばれた事がないから新鮮過ぎる。元は男だが、兄弟を持たなかった身としては姉でも兄でも、そう呼ばれるのはなんだかこそばゆい。まあ、顔に出すようなへまはしないがな。

オレは一夏の手を引きながら異能で探知したこちらに近付く気配の方へと足を向ける。速さは一夏の歩幅に合うように、な。その時に他愛ない雑談を交わす。なんであの場にいたのか、魔法を使うオレは何者なのかを。隠す必要もないのでさらりと旅の最中でオレは神だと。まあ、この世界じゃ神という呼称は間違いだが、惑星ボンジユイがある世界ではラーの一族と呼ばれ、神話にも語り継がれている。

だから、ぶつちゃけ神と言った方が楽なのだ。それにこう言っておけば信じなくても話したくない事だと勝手に推測してもらえる利点もある。だいたいにして頭のおかしい不審者のレッテルを張られる欠点もあるのは仕方ない。

「神？ 東姉は神様はいないって言ってたよ」

「まあ、基本的にはいないな。例外を除けばほとんどの神は自分の世界に引きこもっているからな。一夏がオレと会えたのも偶然で、もう会うこともないだろうよ」

一般的な文明レベルだからなあ、この世界。大して珍しい物はないだろうから一夏を送り届けたら別の世界に行く予定だ。

「神様の世界ってドラゴンとか巨人とかいるの？」

「見たことはあるな。それ以外にも空飛ぶ馬もいるぞ」

「俺も行ってみたい！」

オレをキラキラした目で見上げる一夏に、オレは苦笑を浮かべる。子供の好奇心ほど無鉄砲で純粋なものはない。連れて行くのもやぶさかではないんだが、今の一夏だと心許ない。

「連れて行ってもいいんだが、今の一夏じゃ足手まといだな。もっと強くなって、もっと体が大きくならないと危なくて無理だ」

「むっ、強くなれば連れていってくれるんだよね？」

「まあな。だが、旅を止めるつもりはないから、一夏が生きてる間に再会できるかは微妙だけどな」

オレの言葉に希望に満ちた顔をするが、最後の最後までがっかりする。上げて落とす……その反応になんか楽しくなってくる。まあ、落ち込んだまま引き渡すのもアレだから元気づけるか。オレは自慢の紅い髪を一房だけ切り取り輪っかにする。それを一夏の指にはめると、それは見事な紅い指輪に変わる。

「え、あ、指輪？」

「そ、指輪だ。ただの指輪じゃないぞ。一夏がどんな場所においても居場所が分かる目印だから、この世界にやってきたらそれを頼りに会いに行つてやるよ」

「ほ、ほんと！」

「おう！」

オレが一夏の嬉しそうな声に笑顔で答えてやれば俯きながら「やった！」と呟きが聞こえる。そうだ、ついでに発破をかけておくか。

「ただし、ちゃんと体を鍛えてないと勝手に消えちまうから頑張つて強くなれよ」

「え、わ、わかった！ 具体的にはどう強くなればいいんだ？」

「そうだな……」

場所によっては肉体的な強さは意味がない世界もあるが、基本的に意味がある場合は何か武器が必要だよな。今何かやってるか聞……覗いてみよう。ほう、剣術か。なら、剣で強くなってもらった方がいいな……素質も十分みたいだし。

「武器を持った強さだな。剣がいいかも知れない」

「剣で強くなればいいんだな！ よし、頑張るぞ」

「あとは何事にも動じない心と……慎重さを身につけような。今回ももうちょっと慎重さがあれば落ちなかったかも知れないからな」

覗いた記憶からは足場が崩れて落ちていたからな。あの時にちゃんと足場を確認する慎重さがあれば落ちなかったのは容易に想像がつく。後は最後まで油断しない事か……これは剣術を習って試合を経験すれば自然と直るだろうからいいか。

意気込む一夏にオレは微笑ましい気持ちを味わいながら山道を歩いていけば、気配が2つもうじき接触する。見えたオレが認識した

のなら、当然。

「一夏ーっ！」

「織斑君、無事ですかー？」

向こうも気付く。こちらに気付いた元気なポニーテールの少女と慌てた大人の女性が一夏の名前を叫びながらこちらに駆けてくる。

「箒、先生！」

「ほら、お別れだ。今度会う時は強くなってるよ、一夏」

「うん、レイ姉が驚くくらい強くなってるよ！」

一夏の言葉に満足してオレは世界の壁を越える。オレに関する説明は一夏に丸投げだ。さて、次はどこに行こうかな。

落ちそうになっていた箒を助けたら、代わりに俺が崖から落ちてしまった。運良く頭から落ちずに済んで助かったけど、一番始めに地面と接触した右足に強烈な痛みが走った。あまりの痛さに泣きそうになるが、箒がこつちに来ると叫んでいたから泣き顔は見せられないと歯を食いしばって我慢する。

そんな時に燃えるような紅い髪の女の人が見れた。その女の人はずだの通りすがりみたいだ。俺が崖から落ちて怪我したと伝えると、何か考え出して突然……。

「ほれ、少年。足をオレに見せてみる」

と言われた。最初は呆けたけれど、素直に痛む足を見せる……すると女の人が手を翳したかと思えば、女の人の手ひらから赤い光が出て俺の足に当たり、その光景に俺は驚きの声をあげる。そして驚く事にさっきまで痛みがあった足はみるみる痛みが引いていき、女の人が手を離れた時には痛みは完全に消えていた。

すごいと思う。一体なにをどうしたらこんな事が出来るのか不思議だった。女の方は魔法だと言っていたけれど、それが本当なら大発見だ。女の人……名前を教えてもらったからレイ姉にお礼を言えば綺麗な、思わず見惚れてしまう笑顔を浮かべた。

それから篝達のいる場所まで連れて行ってくれと俺の手を握るレイ姉……レイ姉の手はすべすべでやわらかかった。山道を歩きながら俺はさつき疑問に思った事をレイ姉に質問する。その答えの中に神という信じられない言葉があった。まだ魔法使いの方があの不思議な光を根拠に説得力あると思うんだが。だけど、もし本当なら異世界を旅するというレイ姉の言葉も本当かも知れない。

なら、と俺は男なら一度は見てみたい竜や巨人がいるのかを聞いてみれば、空飛ぶ馬もいるらしい。それってペガサスだよな。行ってみたい、そうレイ姉に言えば今の俺だと無理と言われた。今よりもっと強くなれば……俺は絶対に強くなって色んなものを見てみたい。

レイ姉はなんだか近くにいれば安心できる……会ったばかりなのに変だと思っけど、何故かレイ姉は俺を傷付けないと分かるから。レイ姉から不思議な指輪をもらい、強くなる事を約束する……その時に見たレイ姉の笑顔はずっと忘れられないと思う。

そうして篝と先生がこっちに向かっている時に手が離れると、レイ姉に改めて強くなる事を誓えば、レイ姉は空気に溶けるように消えてしまった。それに啞然としながら、本当に神様だったのかと消えた理由として納得した。

「い、い、一夏……？ い、今の人はも、もしかして？」

「ひ、人が消えて……ふう」

「先生っ!？」

箒が目に見えて狼狽え、先生が気絶したりと色々大変だったけど、この日から俺は強くなる事に貪欲になった。レイ姉と旅をするのを踏まえてサバイバルに関する専門書なんかも読んだりと知識も吸収した。

レイ姉がまた訪れるその日までに驚かせるくらい強くなる……今の目標は千冬姉に一本入れる事。まだまだ目標は遠い。

**第1話【通りすがりの旅人だ】（後書き）**

次の話から一つの世界に長期滞在です。

感想待っています！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3489z/>

---

気まぐれな渡り鳥

2011年12月14日00時53分発行